

ことばの教育のめざすものは何か  
社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育

プリンストン大学 佐藤慎司

キーワード： ことばの教育の目的、社会・コミュニティ参加、自己実現

1、はじめに

本稿では、2013年広島大学で開催された全国大学国語教育学会「言語教育と生きること」でのことばの教育（英語教育・国語教育・日本語教育）に携わる者たちのパネルの議論を簡単にまとめた上で、まず必要なことは、ことばの教育の目的は何か、ことばの教育のめざすものは何か、を考えていくことであることを確認する。その後、筆者の考えることばの教育のビジョン「社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育」（佐藤・熊谷2011）とはどんなものなのか、具体的に提示してみたい。

2、「言語教育と生きること」パネルでの議論

言語教育の二極化はいろいろところで議論されているが、極端に簡潔化してしまえば、それは、1) 言語知識の「効率的な」習得のみに特化する言語教育と、2) 学習者と教師の人間的な成長やそれを通じたコミュニティの変革をめざす言語教育であると言えることができる（神吉・熊谷・佐藤2014出版予定）。今回の「言語教育と生きること」パネルの発表者は共通して前者の言語知識の「効率的な」習得のみに特化するのみの言語教育に様々な角度から疑問を投げかけている。

パネルでは、ことばの教育を言語知識の「効率的な」習得のみに特化する教育と定義した場合、発達障害の傾向が見られる（原田）、あるいは、女性であることの居心地の悪さを覚えている（永田）ような学習者の存在をどう捉えるかが問題になった。つまり、学習者の「生活」に支えられている、「生きる主体性を取り戻す」（柳瀬）、すべての学習者の居場所のある言語教育を目的とすることが必要なのではないかという議論である。

筆者も過去にすべての学習者の居場所のあることばの教育をめざすことが必要なことを強調した（佐藤・瀬瀬 2009）。ことばの教育において、教師が学習者にカリキュラム、シラバス通りにこと

ば、「文化」に関する知識を与えていくこと、そして、その知識の定着度、また、パフォーマンスを評価することは大切なことである。しかし、言語教育をも含むすべての教育には、将来を担う次世代の育成という大切な任務がある。そして、その任務を果たすためには、学習者が自分で自分の学習に責任を持つこと、教師やほかの学習者の持ついいところを自分から積極的に活用し、よくないところはお互いに指摘し合うこと、また、ともに生きる（教室）コミュニティーのメンバーとして教師も学習者もお互いに切磋琢磨し、共通の目標に向けて励まし合う姿勢を養うことも大切であると考えている。

このすべての学習者に居場所のある言語教育を、細川は、私を語れる、つまり、私を聞いてくれる人がいることばの教育であるとも言っている。そして、細川は自らのめざすことばの教育は「ことばの市民」として生きることをめざす教育であると主張している。細川は「ことばの市民」として生きるということは混沌たる「全体」の中に身を置き、生きるということを考えること、そして、行為者一人一人が一個の言語活動主体として、それぞれの社会をどのように構成できるのかという課題と向き合うことであるとも言っている。

そのようなことばの教育を実現するためには、現在のことばの教育には何が必要なのか。永田は教師が自らの生活を重視することが大切だと述べている。そして、学習者が「生活」に支えられた批判的思考力を持つことによって「抑圧」をかけていたのはだれかに気づき、「抑圧」と「救い」を両義的にとらえられるようになることが、学習者のエンパワメントのために必要であると強調している。

それでは、ことばの教育が（英語、国語、日本語教育が共通して）めざすものは何なのだろうか。それは、これまでの言語教育で失われたものを取

り戻すためなのか、それとも、生きる主体性を取り戻すため、生き延びるため、エンパワメントのためなのか、あるいは、「ことばの市民」を作るためなのか、また、それらは異なる目的なのか、あるいは同じ目的を違う側面からみているだけなのか当日のパネルで議論された。

筆者が考えるに、最終的に何を目的にするかは、その教師が置かれている環境、つまり、国、地方自治体、学校、プログラムの枠組みと時代の流れの中でしか設定し得ないし、目の前にいる学習者のニーズも無視することもできない。しかし、最も大切なことは、教師がただそれらの要望に応えることだけに一生懸命になるのではなく、今ここにいる私にしかできないことばの教室をどのように運営していくか、その目的をどのように設定するかであると考えている。そのためには、教師自身が自分は何のためにことばを教えているのか、学習者とどのような未来を築いていきたいのかという未来像を持つ必要がある。しかし、その未来像は、人や知識が時代とともに変化していくように、しっかりと固定されたものではなく、むしろ、変化していくのが当然であると言える。したがって、大切なことは、どの目的がより正しく、どの目的が誤っているのかといった議論ではなく、ことばの教育の目的を追い求め続ける、その行為自体なのではないかと筆者は考えている。

次節では、現時点で筆者の考えることばの教育のめざすビジョンについてまとめてみたい。

### 3、ことばの教育の目的は何か：社会・コミュニティ参加をめざす日本語教育

筆者と熊谷は「社会参加をめざす日本語教育」を以下のように定義している（佐藤・熊谷 2011）。

「社会参加をめざす日本語教育」とは、学習者が自分の属している（属したい）コミュニティ<sup>ii</sup>のルール（例えば、言語や文化の知識や規範など）を学び、それらを単に通例として受け入れるのではなく、批判的に考察し、説得したりされながらいいと思うものは受け継ぎ、そうでないものは変えて行くための努力をし、コミュニティのメンバーとしての責任を担うことをめざす日本語教育である。

この社会参加をめざす言語教育が究極的に強調したいことは、言語を学ぶ・使うということは、本

質的に、社会的な営みであるということ、つまり、ことばを使って自分自身を表現するためには、自己に対峙する他者が必要、つまり、社会・コミュニティの存在を抜きにした言語使用は意味がないということ。また、自己実現を可能にするためには、それを実行する場、そしてそれを認めてもらう場、つまり、社会・コミュニティが必要であるということ。そして、その社会・コミュニティでメンバーの一人として生きていくためには、よりよい社会・コミュニティづくりを何らかの形で担うという責任があるということである（佐藤・熊谷 2011）。

佐藤・熊谷 (2011)では、このような理念を実現するような実践の計画には以下の5つの点に留意する必要があると提唱した。

1. 内容を重視する活動
2. 学習者の個人の興味を尊重する活動
3. 多様性を尊重する活動
4. 文脈を重視する活動
5. 学習者の自己実現を支援する活動

これらの活動の中で、1. 内容を重視する活動、2. 学習者の個人の興味を尊重する活動に関連して、5. 学習者の自己実現を支援する活動は、学習者が自らのことばの学習の目標を設定する上において、特に大切であると筆者は考えている。

学習とは、自分自身の目的を達成、つまり、自己実現のために、生涯かけて、それぞれが主体的におこなうべきものであり、教師や教室活動というのはそのための支援にすぎないと、筆者は考えている。学習者がコース終了後も、教師の手助けなしで自主的に学習をつづけ、社会・コミュニティに参加していけるような指導を行うには、「言語を使って何がしたいのか」、「どんな言語使用者になりたいのか」、「何のために誰とコミュニケーションするのか」などの自己実現を達成する手がかりとなるような問いを学習者とともに考え、学習者自らが言語学習の目標を設定する機会を組み込むことが重要である。そして、筆者は、自己実現が他者の存在なしではあり得ないということ、また、自己実現をめざす学習は、それを可能にするための社会・コミュニティとの関わり、つまり、社会・コミュニティへの参加が必要であると考えている。

このようなビジョン、教育理念はプログラム、

カリキュラムの根底に流れるいわば基盤となるべきものであることは言うまでもないが、このような理念を全面に打ち出したプロジェクト型実践をカリキュラムに取り込むことも可能である<sup>iii</sup>。これまでに筆者らは日本語教育においてそのようなプロジェクトをいくつか開発してきた（Fukai [Nishimata] & Noda 2011, Konoeda 2011, Sato & Hanabusa 2011, 佐藤・熊谷 2011, 西俣・熊谷・佐藤 執筆中）が、次節ではその新たな事例として、「見つめ直そう自分の将来と日本語」プロジェクトを紹介する。

#### 4、見つめ直そう自分の将来と日本語プロジェクト<sup>iv</sup>

「見つめ直そう自分の将来と日本語」プロジェクトは、2013年秋学期に米国東海岸にある私立大学の日本語上級の学習者を対象に行った活動である。この活動で学習者は自分の将来と日本語学習の関係を考え、自分の将来と日本語の関係、社会・コミュニティ貢献、自分の日本語に関する3種類の目標を設定、その後、身近なコミュニティと関わりながら目標達成に向けて活動を行った。学習者に伝えた本活動の目的と活動概要は以下の通りである。

##### プロジェクトの目的と活動概要

###### ① 自分の将来と日本語の関係

自分がなぜ日本語を勉強しているのか、日本語で何がしたいのか、何ができるようになりたいのか、将来何がしたいか（仕事、趣味など）、どんな人間になりたいかなどをよく考えていく。

###### ② 参加してくれる人・グループ・コミュニティへの貢献

このプロジェクトに参加してくれる人々に何か利益があるか、役に立つかを考える。

###### ③ 自分の日本語

自分の日本語を振り返って、今の自分には何が足りないのか、これから自分の日本語をどう伸ばしていきたいか考える。

- ①と②と③の接点はないか考え、実際に何か活動をする。

- ①と②と③を達成するためには何が足りないか、具体的に何をしたらよいか考え、自分の今学期の目標(Can-do statement<sup>v</sup>)を決め、そ

れが達成できるように努力する。

本プロジェクトでは、まず、学生はプロジェクトの目的と手順について説明を受けた後、自分の将来と日本語、コミュニティへの貢献、自分の日本語に関してそれぞれ目標設定を行う。そして、学習者は自分たちの選択した活動を通して、自分の将来と日本語学習の関係を積極的に見つめ直していく。活動では、自分のもつさまざまな言語のレパートリーを活用し同時に新しいレパートリーも学習しながら、周りのリソースを積極的に活用し、自分の興味のあるコミュニティへどんな貢献ができるか考え実行していく。このプロジェクトでは、教師との面談、クラスメートとのディスカッション、中間報告など、活動の振り返り、問題発見解決の機会を多く設けた。また、学期末には最終発表を行った。実際の活動手順は以下の通りである。

##### 活動手順

1. プロジェクトの目的と手順について説明を受ける。
2. プロジェクトの目的の①日本語と自分の将来の見直し、②参加してくれる人・グループ・コミュニティへの貢献、③自分の日本語をよく考え、具体的な計画と目標（Can-do statement）を提出する。
3. 目的を達成できるように各自活動を行う。
4. 定期的に教師と個人面談を行い、活動で何をしているかについて説明し、その時点での問題などについて相談する。
5. 授業でクラスメートに自分のプロジェクトについて話し、アドバイスや意見をもらう。
6. 教師と話し合った内容、プロジェクト中に感じたこと、思ったことを記録としてメモしておく。
7. 中間発表では、それまでにどんなことをしたか、活動を通して、自分自身や自分の将来への考えでどんなことが変わったかなどについて発表する。
8. 年度末のスピーチでは、このプロジェクトを通して、自分自身や自分の将来への考えでどんなことが変わったか、どんな大切なことを学んだかなどについて自分の考えを述べる。（とくに、聞き手はクラスメート、先生、日



本語を勉強している後輩たち、スピーチコンテストを聞きに来てくださる人たちであるということ念頭に置くこと。)

学習者がこの活動で選んだ活動は実に様々である。例えば、2013年秋学期に学習者が選んだトピックは以下の通りである。

- 絵本作成と読み聞かせ
- 絵本の翻訳と読み聞かせ
- 原子力利用についての意見交換
- 日本語と英語の会話パートナー
- 日本の音楽事情について
- 日本語と韓国語の比較
- 日本の職場での女性の状況について
- 日米の動物愛護について

また、実際のこの活動の具体的な目標設定であるが、学習者が自分で目標 (can do statement) を設定し、教師とその目標を確認、特にコミュニティーへの貢献、自分の日本語に関する目標は、あまりにも漠然としすぎているものに関しては若干の修正をしてもらった。

しかし、日本語と自分の将来に関する目標に関しては、将来の目標が定まっていなほとんどの学習者にとって目標設定が大変だったようである。例えば、絵本作成と読み聞かせを活動内容として選んだ学習者は、地域の高校生達と一緒に日本語の絵本を作成し、日本語の本の読み聞かせ会で作成した本を子供達に読み聞かせるといった活動を行った。その学習者の場合、まだ大学2年生ということもあり、将来の目標は明確に定まっていなかった。そのため、活動の当初は、とりあえず日本語学習の楽しさをほかの人たちにも伝えたいということでプロジェクトを始めた。その学習者は、自分の日本語に関する目標として、本人が苦手だと感じていた、他の人への企画などの説明、あるいは、メールのやり取りの日本語力を伸ばすという目標を設定したが、その後、その自分の日本語力の目標と将来自分の専門でもある工学の仕事とを結びつけようと試みた。そして、将来自分が日系企業や研究所に勤めた際、日本とのプロジェクトなどでのやり取りで、企画を説明をしたり、丁寧なメールのやり取りができる日本語力は役に立つのではないかと考え始めたのである。そのため、絵本の読み聞かせの活動が一段落した段階で活動内容を追加し、オンラインの科学技術に関す

る新聞記事などを読み、そのニュースを個人面談の時間を利用して教師に、また、別の時間を取って日本人の知り合いに説明したり、意見交換をするという活動も取り入れ始めた。

この「見つめ直そう自分の将来と日本語」プロジェクトで、教師は「将来どんな人になりたいのか、どんな仕事がしたいのか」、「日本語を使って何がしたいのか」、「どんな日本語話者になりたいのか」、「何のために誰とコミュニケーションするのか」、「日本語を使って自分は社会・コミュニティにどんな貢献ができるのか」という問いを、何度も繰り返し学習者に問い続けた。参加した学習者の中にはまだ大学に入ったばかりで、そのような問いを全く考えたことがなかったという学習者から、就職を間近に控え真剣に自分の将来を考えている学習者までさまざまであったが、多くの学習者が漠然と日本語が上手になりたいと考えていた状態から、能動的に日本語学習と自分の将来について考え、具体的な目標設定をし、その目標達成に向けて社会・コミュニティと関わりながら日本語学習の目的について最後まで問い続けていた。

日本語学習者の中には、上級レベルになっても自分のことを日本語が不十分で常に直してもらわなければならない存在であると捉えている学習者も多い。しかし、このプロジェクトでは、そのような学習者には特に、日本語を含めた複数の言語・文化を知っているメリットを活かし、自分は社会・コミュニティに何が与えられるのか (社会・コミュニティへの貢献) ということを考え活動するように指導した。その結果、日本語以外の言語でしか知られていない情報や、自分や自分の周りの人の一人の意見などを日本語で相手に伝え情報交換を行ったり、日本語には翻訳されていない絵本を外国語から日本語に翻訳して読み聞かせたりするような活動が積極的に行われた。この場合、大切なことは、言語や「文化」の違いに焦点を当てながら (自分が2つ以上の言語、「文化」を知っていることのメリットを考える) 同時に、言語や「文化」の違いに焦点を当てすぎない、つまり、同じ人間として目の前にいる相手をしっかりと見つめコミュニケーションするというスタンスであろう。

上の例であげた学習者のように、好きなことを

始める中から、目標に対する具体的な意識が生まれてくることもある。また、学期の途中で活動内容を変えたり、最後までどんな活動をするか落ち着かない学習者も数人存在した。これは、学習者が大学で多様なバックグラウンドをもつ人たちと触れ合い、いろいろな科目を履修しさまざまな知識を学んでいく中で、自らの価値観が揺さぶられている状態、また、その中で自分の卒業後の進路も考えていかなければならないその不安定な状態を如実に表しているとも言える。それはまさに「混沌たる「全体」の中に身を置き、生きるということを考える」ことであり、学習者が真剣に社会と将来を考えているということの現れであるとも言える。

## 5、おわりに

本稿では、2013年全国大学国語教育学会「言語教育と生きること」パネルの議論を簡単にまとめた後、一番大切なことは、ことばの教育の目的、ことばの教育のめざすものは何かを考えていくことであることを確認した。その後、筆者が現時点で考えていることばの教育の目的、「社会・コミュニティ参加をめざすことばの教育」のビジョンとその具体例である「見つめ直そう自分の将来と日本語」プロジェクトを簡単に紹介した。

従来、外国語教育において、学習者は、教師から与えられる知識や情報を蓄積し、「正しく」学習言語を使用することが期待されてきた。もちろん、言語や文化の知識を学んでいくことが大切なのは言うまでもないが、何を目的に学習者は日本語を学んでいるのかという根本的な問題に立ち戻った時、我々ことばの教師は、学習者を、ことばをつかって「社会に参加し、様々な問題解決のための一端を担って行く一個人」であると捉え直す必要があるのではないかと強く感じている。もちろん、自分の学校のカリキュラム、クラス活動の設計には、言語教育の動向、地域や学校、そして、学習者のニーズを無視することはできないが、その中で教師がどんな教育理念を持って実践を行っていくかということは非常に大切なことである。なぜなら、教師が行っている実践は社会やコミュニティにインパクトを与えているからであり、教師自らの実践を通して、社会やコミュニティに影響を与え、変えていくこともできるからである。

## 参考文献

- 神吉宇一・熊谷由理・佐藤慎司(2014 出版予定) 序章. 佐藤慎司・神吉宇一・熊谷由理・高見智子(2014 出版予定)『内容重視の批判的日本語教育』ココ出版
- 佐藤慎司・神吉宇一・熊谷由理・高見智子(2014 出版予定)『内容重視の批判的日本語教育』ココ出版
- 佐藤慎司・熊谷由理(2013)『異文化コミュニケーション能力再考』ココ出版
- 佐藤慎司・熊谷由理(2010)『日本語教育とアセスメント』くろしお出版
- 佐藤慎司・熊谷由理(2011)『社会参加をめざす日本語教育』ひつじ書房
- 深井美由紀・熊谷由理・佐藤慎司(2014 出版予定)『社会参加をめざす日本語教育の実践(仮題)』ココ出版
- 佐藤慎司・ドーア根理子(2008)『文化、ことば、教育』明石書店
- 佐藤慎司・瀬藤憲子(2009) 多様な学習者とブログプロジェクト. 米国北東部日本語教師会プロシーディングズ.
- Fukai [Nishimata], M. & Noda, M. (2011). Creativity in Community Involvement Projects in Study Abroad Programs. *Occasional Paper 11, Association of Teachers of Japanese*. pp. 42-60.
- Konoeda, K. (2011). Digital story telling and creativity in Japanese language education: Analysis of a project in an intermediate Japanese-as-a-foreign language classroom. *Occasional Paper 11, Association of Teachers of Japanese*. pp.13-27.
- Lave, J. and Wenger, E. (1991) *Situated Learning*. New York: University of Cambridge Press.
- Sato, S. & Hanabusa, N. (2011). Global issue projects and “creativity.” *Occasional Paper 11 Association of Teachers of Japanese*. pp.28-41.
- Sato, S. & Doerr, N. (eds.) (2014). *Rethinking language and Culture in Japanese Education*. Clevedon: Multilingual Matters.

---

<sup>i</sup> ここでいう「社会」とは日本社会、国際社会といった包括的な全体社会、もっと小さなコミュニティやグループといった自然発生的、および人為的な集団や仲間もその形態として捉えている。

<sup>ii</sup> 本稿での「コミュニティ」とは地域社会だけではなく、研究仲間、趣味仲間、クラスメートなど、さまざまな「実践のコミュニティ」(Lave & Wenger 1990, Wenger 1990)を指している。

<sup>iii</sup> 社会参加をめざすことばの教育の理念をプロジェクト型実践として取り入れた事例には、ほかにブログプロジェクト(佐藤・熊谷 2011)、ポッドキャストプロジェクト(佐藤・熊谷 2011)、社会に関わろうプロジェクト(Sato & Hanabusa 2011, 西俣・熊谷・佐藤 執筆中)、デジタルストーリーテリングプロジェクト(Konoeda 2011, 西俣・熊谷・佐藤 執筆中)、コミュニティ参加型プロジェクト(Fukai [Nishimata]& Noda 2011, 西俣・熊谷・佐藤 執筆中)がある。

<sup>iv</sup> 本プロジェクトは柴田智子さんとの協働プロジェクトである。プロジェクト開発、実行などにおいては柴田智さんが中心になりこのプロジェクトを進めていただいた。この場を借りてお礼を申し上げたい。

<sup>v</sup> Can do statement に関しては <https://jfstandard.jp/cando/top/ja/render.do> を参照のこと。